

中世の四天王寺旧境内遺跡

松尾 信裕

要旨 飛鳥時代に創建された四天王寺の周辺には古代から近世まで遺構が発掘調査で見つかった。四天王寺周囲には中世には門前町が形成され、15世紀末には「天王寺は七千間在所」とまで言われた都市的な様相を見せていたとされている。その姿を四天王寺境内の周囲で行われた発掘調査の成果から検討した。境内の東部や北部では区画の大溝が見つかるが、それらは時期が新しくなるにつれ、境内に近づいてきた。また、地形的な制約から、町として広がることはなかったと推定した。境内の西部では建物の柱穴が多く見つかり、多くの掘立柱建物が建ち並ぶ町場と推定できた。その出現は平安時代に遡り、室町時代には完成した街区となっていたと想定した。

はじめに

聖徳太子信仰の聖地とされる四天王寺の周囲には、浄土教や日想観の流行にあいまって多くの人々が居住する門前町が形成されていった。室町時代後半の明応8年(1499)には「天王寺ハ七千間在所」(『大乘院社雑事記』)といわれるほどの都市となっていた。

それよりおよそ100年後の天正11年(1583)、上町台地北端の大坂本願寺の跡地に大坂



図1 『大阪実測図』

TP+15m付近にあり、94-6次調査で見つかった谷地形はこの二つの調査地の間を通っていることが分かる。

ST95-9次調査地は94-6次調査地の北東に位置し、紺屋町の南北道路の東側街区にあたる。地山は94-6次調査地とほぼ同じTP+15m前後にあり、16世紀前半に埋没した東西大溝と南北大溝が見つかった(図4)。

二つの大溝は一連のものと推定されており、東西方向の大溝が西端で南に曲がる。他に15世紀から17世紀の井戸が見つまっている。南北溝は敷地の西端から9m付近にあり、近世の敷地境とは異なる

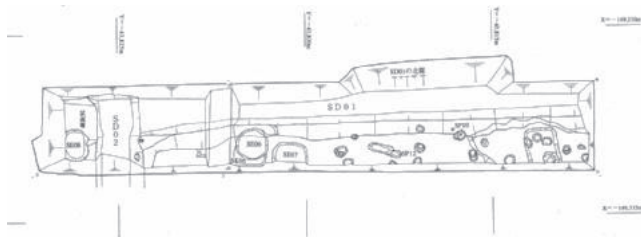


図4 ST95-9次調査地平面図

場所にある。また、東西大溝も近世屋敷地のほぼ中央にあり、これも近世の敷地境とは異なるため、近世街区建設以前の遺構と考える。

ST99-5次調査地は95-9次調査地の南にある敷地で、奈良時代から室町時代まで

の各時期の遺構が見つかった。室町時代の遺構には2条の大溝がある(図5)。

下位の大溝は上位の溝によって削平されており、幅は2m以上あろう。14世紀末に埋没している。上位の大溝は幅5m、深さ1.2mある。15世紀前半の遺物が出土した。この二つの大溝は四天王寺境内の区画施設であろう。

先の94-7次調査地で見つかった大溝は16世紀末であり、95-9次調査地で見つかった大溝は16世紀前半に埋没している。四天王寺北東部にある大溝でも埋没時期に差があり、時期が新しくなるにつれ、大溝が掘られる位置が四天王寺境内に近づいてきている。

ST96-4次調査地では奈良時代から室町時代までの遺構が見

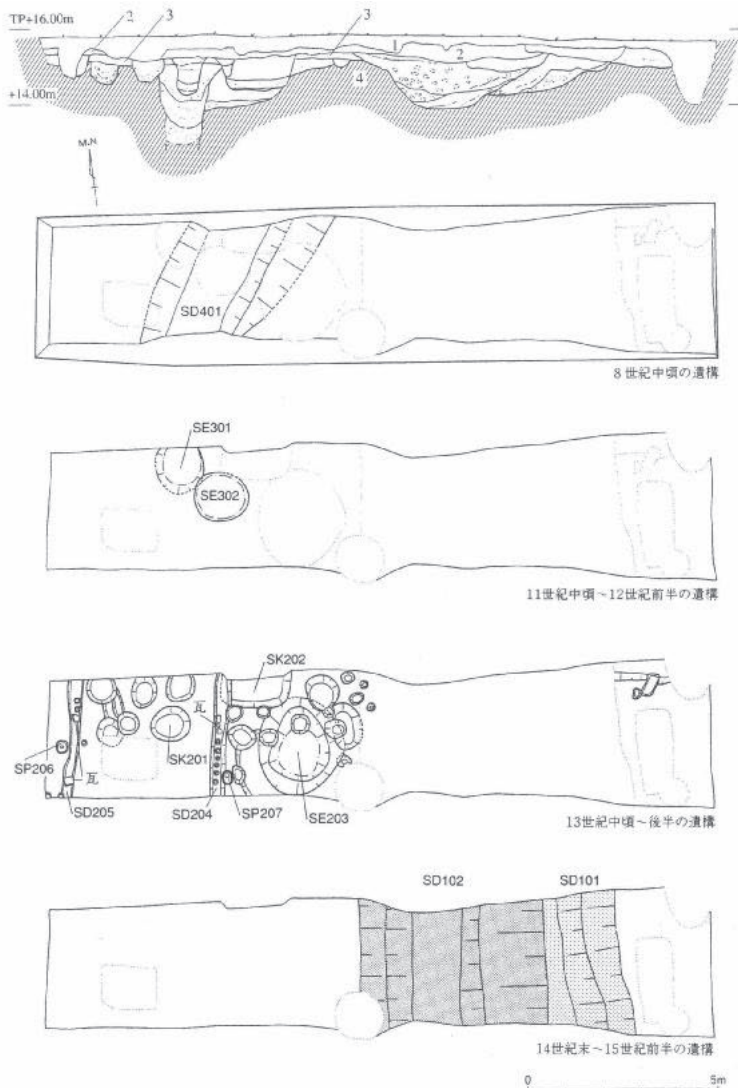


図5 ST99-5次調査地平面図



図6 ST96-4次調査地平面図

つかっている。室町時代の遺構には礎石建物・石垣・堀・溝・井戸がある（図6）。

礎石建物は西端の高台に見つかっている。建物の方位は正方位である。建物の下層の整地層から14世紀末から15世紀初頭の遺物が出土しているため、室町時代中頃以降に属すると推定される。

その東側は4mほど低くなる南北方向の斜面があり、その前面に南北方向の石垣が築かれ、石垣の東には幅約10m、深さ約2.5mの南北方向の堀がある。礎石建物の東側斜面は直線ではなく、北部よりも南部が東に広がっている。石垣は北部の斜面が西に窪んだ所に築かれている。

石垣は南北13m以上、高さは約1.2m、2段の石が残っている。東側に面を持ち、南端は西側の高台が最も東に広がる地点で収束する。西側の斜面が西に窪んだ所の前面に築かれており、西側の高台を広くするための護岸石垣と推定されている。

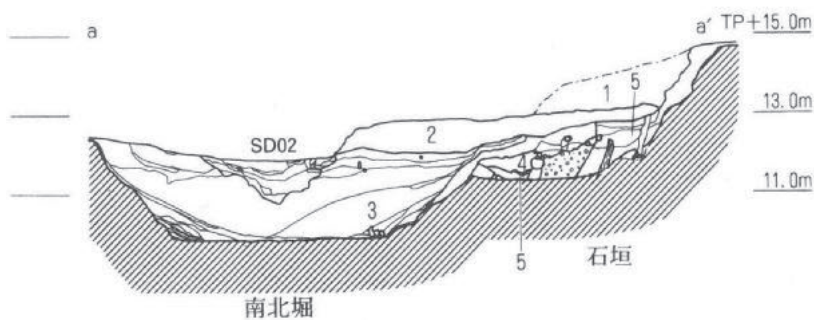


図7 ST96-4次調査地断面図

石垣石は横0.5~1.1m、縦0.4~0.6m、奥行き0.7~1.1mほどの自然石で、横に長くなるように積んでいる。本来は西側の高台の高さまで積んでいたであろう。石垣の裏込めは拳大から人頭大の礫が詰め込まれている。裏込めは

北部が広く、南部の石垣端では狭くなる。裏込め部の西側は裏込め部とは異なった曲線となっており、挟られているように見える。このことから、石垣を壊す際に西側高台の北部を削り込んで、窪みになっ

たのかもしれない。裏込め部からは16世紀第2四半期の遺物が出土している。

石垣東側の南北堀は報告書〔大阪市文化財協会1999〕の断面図を見れば、石垣が壊れてから掘削されたと理解できるため（図7）、石垣に代わる区画施設として掘削されたと考えられる。規模が大きく、四天王寺の東側を画する区画施設であろう。堀埋土から16世紀第3四半世紀の遺物が出土している。

堀が埋没した後も堀部分は一段深くなっていたようで、低くなっていた堀跡に18世紀代の水溜め状

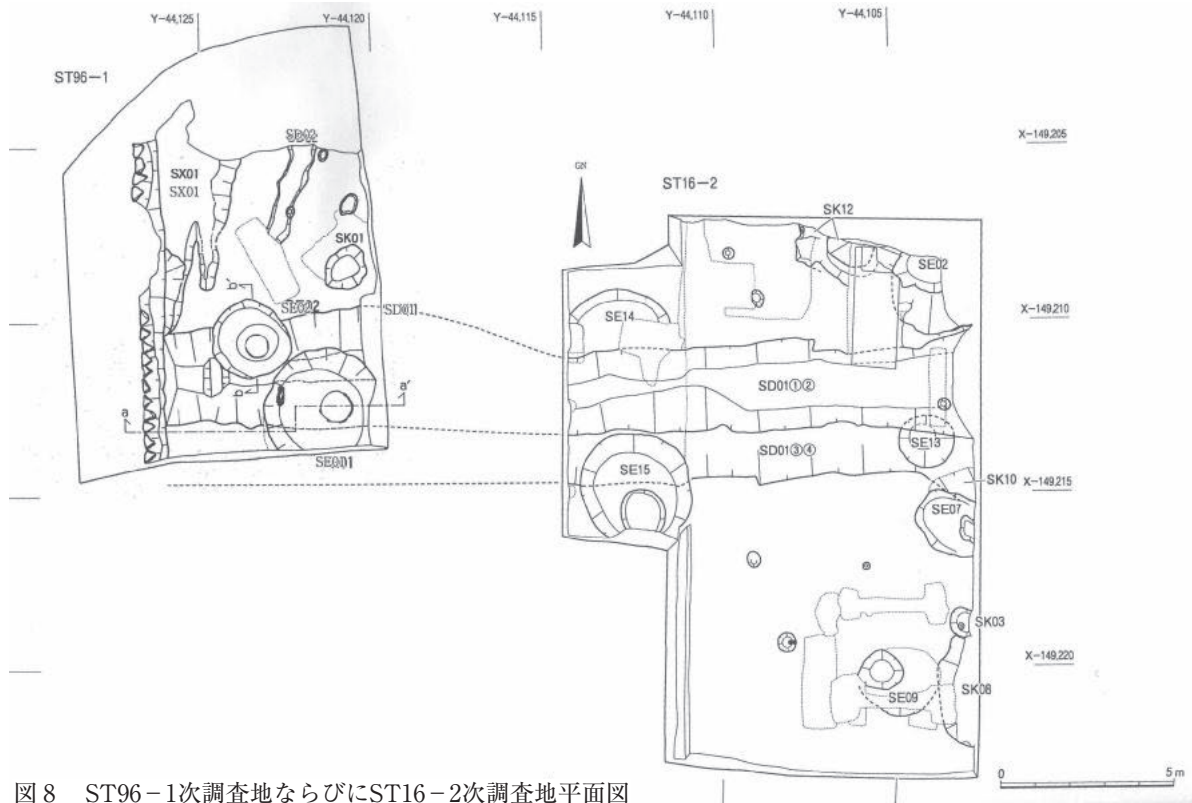


図8 ST96-1次調査地ならびにST16-2次調査地平面図

遺構が作られている。近世の遺構は他には見つかっておらず、近世にはこの一帯の土地利用はさほど活発ではなかったようだ。近代の『大阪実測図』を見ても、この敷地の東側敷地は畠となっており、町の東端であった。

ST96-1次調査地とST16-2次調査地では一連の東西大溝が見つかった。先に見つかった96-1次調査地では幅3.2m、深さ1.5mの1条の大溝であったが、東側の16-2次調査地では二つの溝が重複しているのが確認された（図8）。延長線上にある大溝の下部埋土を切って井戸が築かれ、その井戸が埋没した後に上部埋土が堆積したとしている。古い時期の大溝が二つの調査地の間で北か南に折れ曲がっているのかもしれない。

南方のST13-5次調査地では敷地北端部で東西方向の溝が見つかった（図9）。幅は約1m、深さは0.1~0.5mである。溝の方位は現在の敷地境と同じで、近世までの字界に並行する。

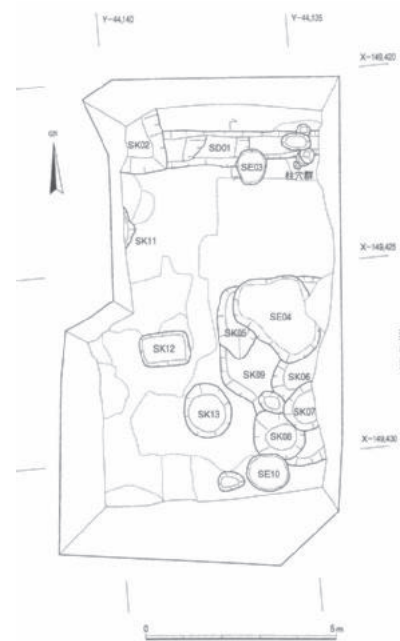


図9 ST13-5次調査地平面図

15～16世紀代の遺物が出土しており、「字往大道」と北の「字裏筋」の境に位置する東西道路の南側溝の可能性もある。多くの土坑から15～16世紀代の遺物を出土しており、室町時代後半期に活発な土地利用が行われている。

四天王寺境内の東側では平安時代に活発な土地利用が認められるが、室町時代になると大溝が出現している。大溝には埋まる時期に違いがあり、複数の並行する大溝が同時に存在するのではなく、新しくなるにつれ寺域を囲う大溝が四天王寺境内に近づきつつ作り変えられて境内の範囲を狭くしているようだ。

2. 境内北部

四天王寺境内の北では東方に位置するST15-1次調査地で中世に遡るのではないかと推定される東西溝が見つかった（図10）。幅1.1m、深さ0.7mで東部ほど狭く浅くなる。これまで東部で検出されている大溝よりも規模が小さく、西方のST88-3次調査地では見つからない。境内全域を区画する溝ではないようだ。

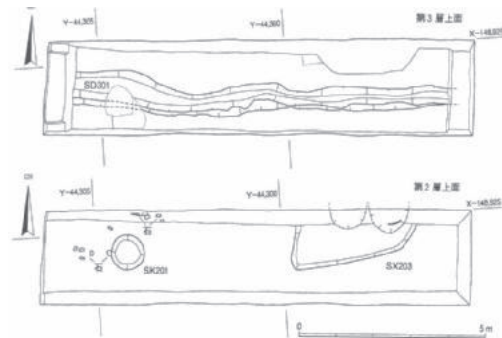


図10 ST15-1次調査地平面図

ここでは中世末に属する地層から梵鐘あるいは半鐘の鋳型と推定できる鋳造遺物が出土している。また、豊臣後期から徳川初期の地層からも甑の破片や支脚などが出土している。鋳物師の敷地が近隣に存在するのであろう。

ST96-7次調査地は東端の94-7次調査地の西に位置する。ST94-7次調査で検出された2条の東西方向の大溝の西延長部が見つかる場所ではあったが、調査面積が狭く、大溝を1条発見するにとどまった（図11）。

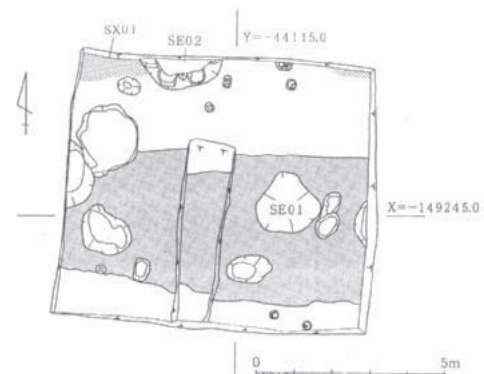


図4 検出遺構 (SD01 掘削前)

発見された大溝からは15世紀代の遺物に混じって16世紀代の遺物もある。東に位置している94-7次調査地で見つかった2条の大溝も、15世紀代から豊臣期まで下る遺物が見つかり、出土する遺物の年代は同じである。

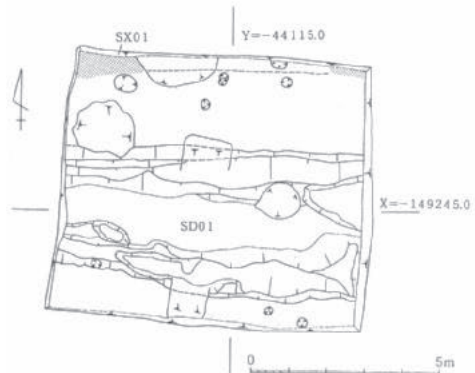


図11 ST96-7次調査地平面図

ST85-1次調査は四天王寺境内の周辺で行われた最初の発掘調査である。ここでは飛鳥時代・鎌倉時代・室町時代・安土桃山時代の遺構が見つかる。鎌倉時代の遺構には調査地のある街区方位とは異なる、四天王寺中心伽藍と同じ正方位の東西大溝 (SD201) がある (図12)。これから鎌倉時代には

この調査地は四天王寺の寺域に含まれていたと推定されている。ここでは豊臣後期の南北溝（SD301）が見ついている。

ST85-1次調査の西隣のST87-4次調査地では室町時代の土坑や豊臣期の南北溝が見ついている。北のST88-3次調査地では現在の街区方位とは異なる、

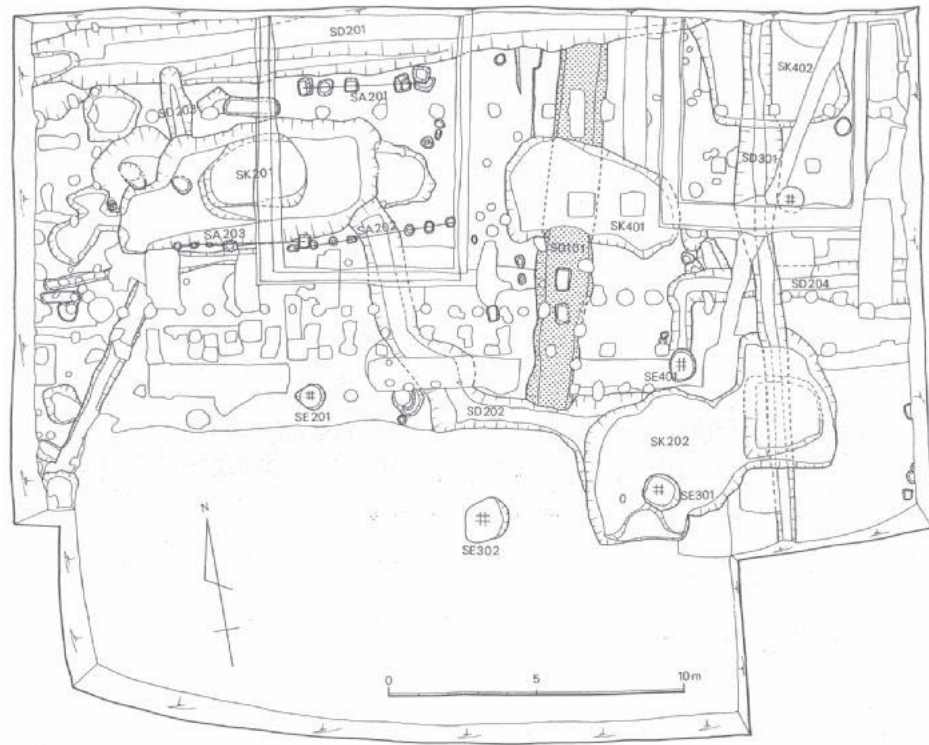


図12 ST85-1次調査地平面図

北で東に振る溝が見ついている。埋土からは中世後半の15世紀後半の遺物が出土している。中世後半という四天王寺伽藍と同じ正方位の遺構がほとんどであったが、この溝だけは北で東に振っている。

『大阪実測図』を読むと、「字横町」の街区は東西方向の道路や敷地境の線は西で北に振る城下町の軸線に共通するが、南北方向の敷地境は四天王寺伽藍と同じ正方位を指向している。敷地は長方形ではなく平行四辺形となっている。このことから秀吉による城下町建設において、東西方向の「字横町」の道路は北部の南北平野町に直行する方向に設定されたが、南北方向の敷地境は四天王寺の伽藍やその周囲に広がっていた方位の軸線を踏襲したような折衷した敷地割が行われている。四天王寺の境内に接していたことでこのような形の街区を設定したのであろう。

3. 境内西部

中世の四天王寺門前町は境内の西を限る石の鳥居周辺に多くの家が建ち並んでいたと推測される。その一帯では多くの発掘調査が行われ、掘立柱建物や大溝が見ついている。いずれも調査面積が狭く、当時の1筆の屋敷地全体が判明する調査はない。

ST89-4次調査地では鎌倉時代の東西大溝がある。幅約1m、深さ0.3mで、敷地内で途切れてしまう。他に小型で円形の柱穴が調査地内に散在するが、建物として復元できなかった（図13）。

ST88-10次調査でも89-4次調査地と同様の小型で円形の柱穴で構成される掘立柱建物3棟と井戸、東西大溝が見ついている（図14）。建物は重複しており、建て替えられている。

ST89-2次調査地では中世に属する小型で円形の柱穴が多く見付き、それらでいくつかの建物や

堀が復元されている。井戸も9基見つかった（図15）。調査地の東を通る南北道路（椎寺筋）は明治時代に敷設された道路なので、この敷地の間口は西側にあると考える。調査地は敷地奥に当たるのであろう。井戸は建物の背後にあったと推定する。

ST04-1次調査地は鎌倉時代や室町時代の土坑や溝があり、北の89-4次調査地と同じ時期の遺構が広がっている（図16）。遺物も平安時代以降、鎌倉・室町時代の土器が多く出土している。長期にわたって利用された場所である。

ST04-1次調査地の南にあるST89-5次調査地でも多くの中世遺構や遺物が出土している。小型円形の柱穴が調査範囲に散在しているが、建物の復元には至っていない。井戸も1基確認されている（図15）。

ST89-6次調査地では室町時代に属する掘立柱建物や堀・土坑がある。掘立柱建物の掘形は隅丸方形で方形の柱痕跡が確認されている。堀の掘形は円形で直径が90cmもあり、深さも40cm、柱痕跡も30cmと大きい。柱間隔は4.3mと広い。いずれも現在の街区方位と同じである。ここでも小型の柱穴が散在する（図16）。

ST93-1次調査地では近世段階に削平されたようで、時期が判明する遺構は見つからなかった。

四天王寺境内の西側に接する調査地では小型の柱穴が多く見ついている。これらは建物の柱穴と推定できるが、建物の復元はできなかった。

以上の調査地では小型の円形を呈する柱穴が多く存在している。これらは掘立柱建物を構成する柱穴と考える。多く重複していることから、頻繁に建替えが行われていると考える。西門前の賑わいが想像できる。

四天王寺境内西部では谷町筋を西に越えた大阪星光学院構内での発掘調査〔西近畿文化財調査研究所2006〕では、鎌倉時代や室町時代の遺構が多く見ついている（図17）。

調査範囲全面に広がる小型で円形の柱穴や土坑群・井戸など、長期間にわたる活動の場所であったと推定できる。その中にはハマグリを大量に投棄した土坑（報告では貝塚とする）や井戸が見ついている。ハマグリは天王寺の西にある今宮の特産物と知られているが、天王寺門前町でもハマグリの剥き身を作っていたことがわかる。ハマグリと一緒に14世紀代の遺物が出土している。

ここではこの土坑を切る南北堀も見つかった。途中折れ曲がりながらも調査地を南北に縦断しており、四天王寺境内の一時期の区画の堀ではないかと想定できる。14・15世紀代の遺物が出土した。こ

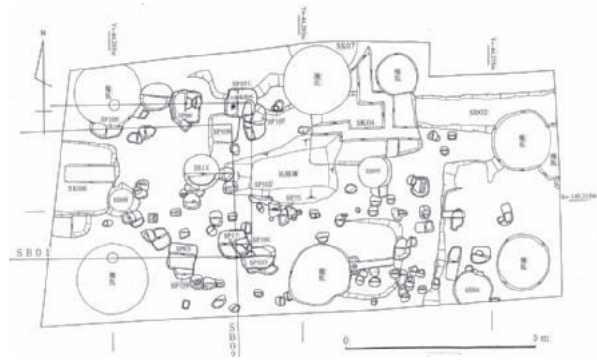


図13 ST89-4次調査地平面図

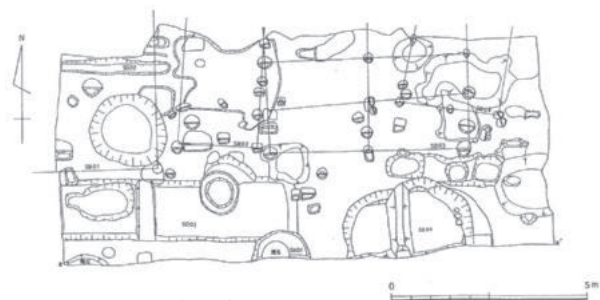


図14 ST88-10次調査地平面図

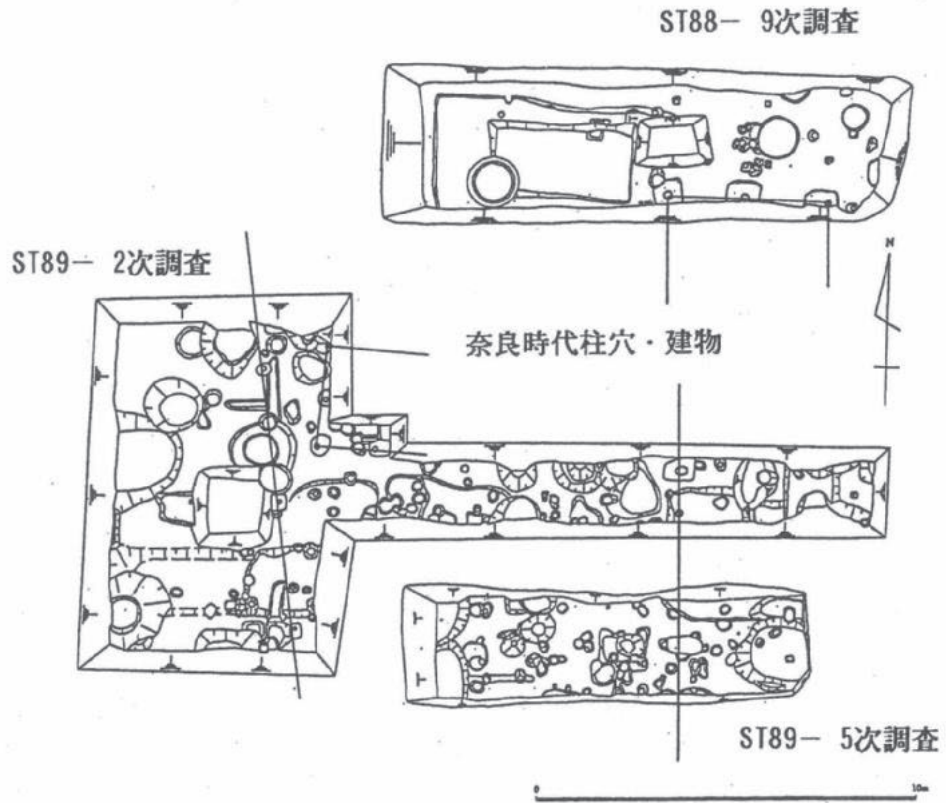


図15 ST88-9・89-2・89-5次調査地平面図

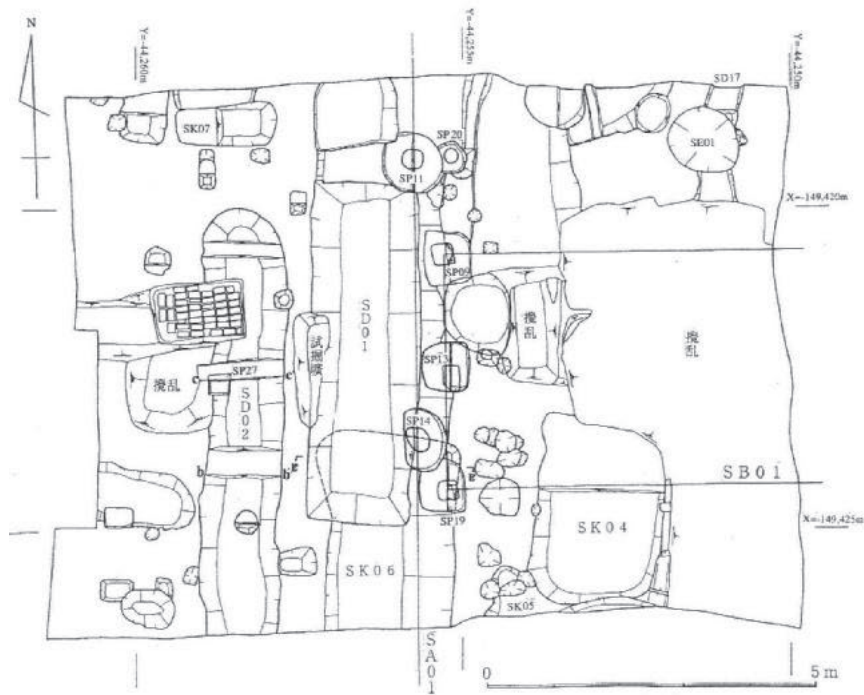


図16 ST89-6次調査地平面図

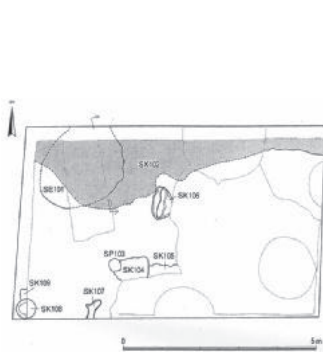


図19 RJ12-1次調査地平面図

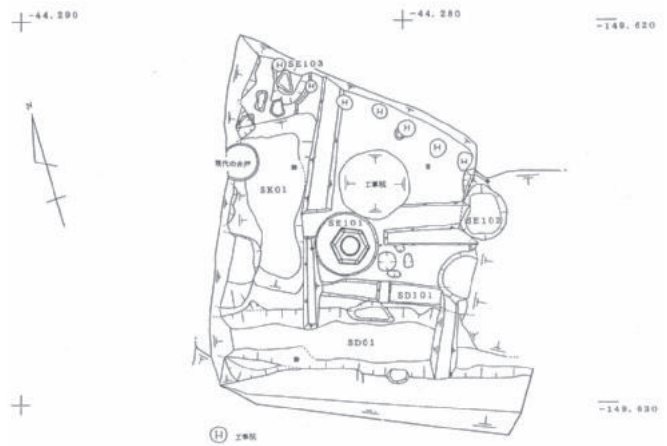


図20 ST92-7次調査地平面図

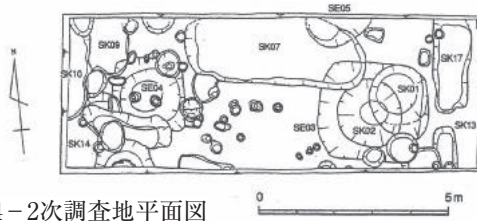


図21 CU94-2次調査地平面図

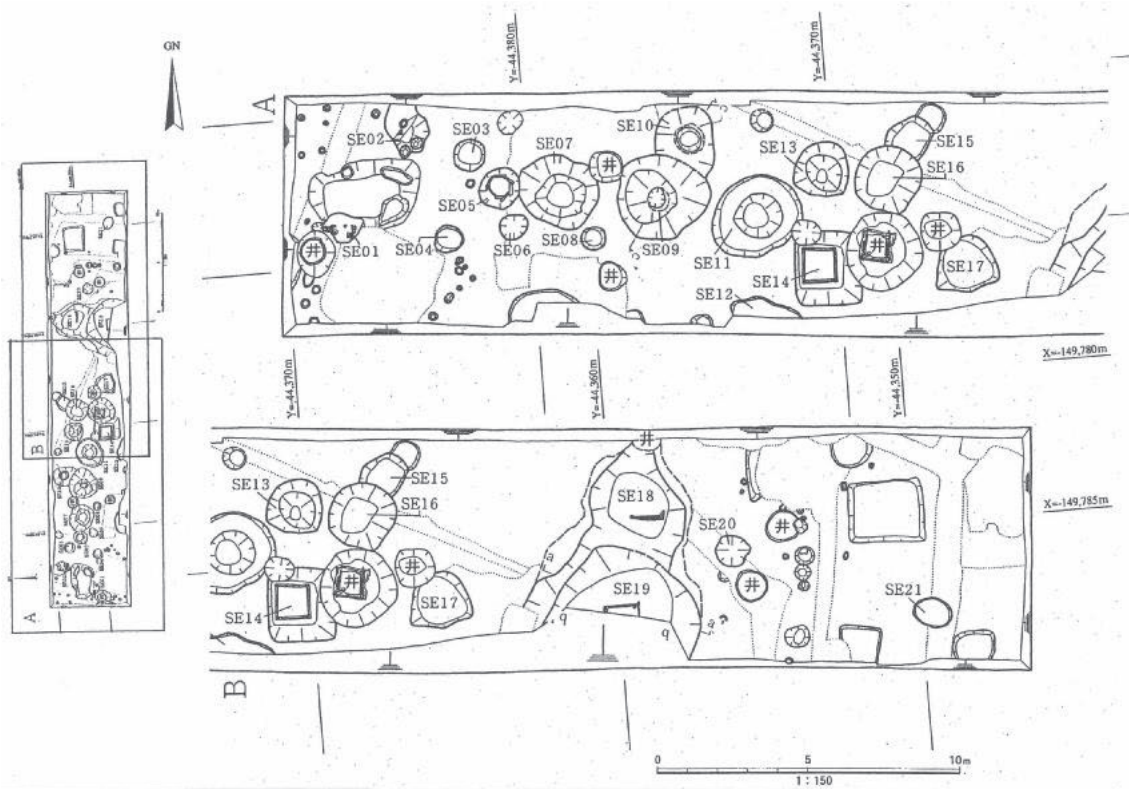


図22 CU98-1次調査地平面図

がわ)に含まれる。ここでは平安時代12世紀代の井戸が1基、鎌倉時代の井戸と土坑が1基ずつ、室町時代の土坑が見つかった(図21)。

この南の「茶臼山古墳」の東側ではCU98-1次調査が行われ、12世紀から16世紀中頃までの井戸が21基検出された。調査範囲には井戸が東西に並び、東西道路に間口を開く敷地が展開している(図22)。

境内西側にある調査地は鎌倉時代から室町時代にかけての小型で円形の柱穴が多く見付き、この一帯が中世の町場と推定できる。明治年間の『大阪実測図』の街区や道路と整合的に見つかる屋敷地が展開していることがわかるが、この一帯に広がる伽藍と同じ方向の道路は平安時代に出現し、室町時代には完成したと推定できる。

4. 境内南部

四天王寺境内の南西部でも数箇所の調査地がある。「字烏橋」の街区にあり、商業者が多く居住していたと想定される地域に当たる。

ST92-10次調査地は92-2次調査地の南に位置し、中世の南北大溝とそれに取り付く東西溝が見ついている。時期は鎌倉時代から室町時代と調査者は想定している。また南北大溝の東に溝と同時期と想定されている掘立柱建物が4棟復元されている(図23)。

この調査地では「溝1」とした南北溝の西にある「柱穴及び柱穴関連遺構1」と呼称されている興味深い遺構がある(図24)。それは径約120cm、深さ約90cmの大型の柱穴で、柱穴の底には30cm四方の石の礎板が置かれていた。その柱穴の南北に幅約30cm、深さ約60cmの溝状遺構が対称的に取り付いている遺構である。中央の柱穴と南北の溝状遺構の埋土は同じとされ、同時に埋まったものと考えられる。

平面形だけの共通点だが、兵庫県伊丹郷町でよく見ついている酒造関連の男柱の抜取り穴の形状に近似する。中央の柱穴が男柱の掘形で、南北の溝状遺構が男柱の跳ね上がりを押える根がらみの掘形と考えることができる。

この遺構が男柱の掘形とすると、これに接して絞り出た酒を溜める垂壺を埋める掘形が付属する。この調査地の遺構配置図を見ると、「柱穴及び柱穴関連遺構1」の周囲には「柱穴1」と呼称された柱穴や、遺構番号は付されていないが円形や楕円形の穴が見ついている。「柱穴1」は径約80cm、

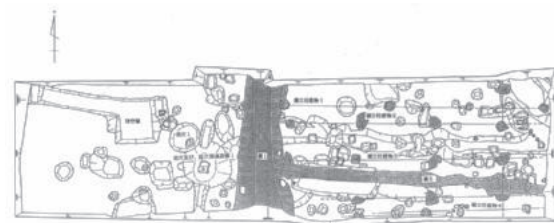


図23 ST92-10次調査地平面図

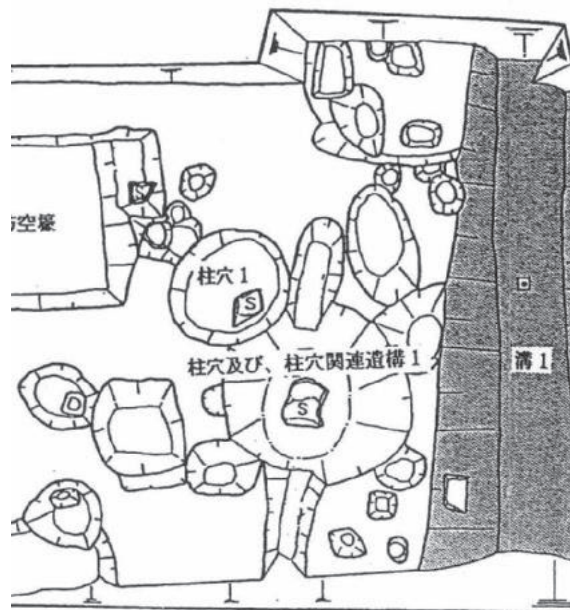


図24 ST92-10次調査地平面図-部分

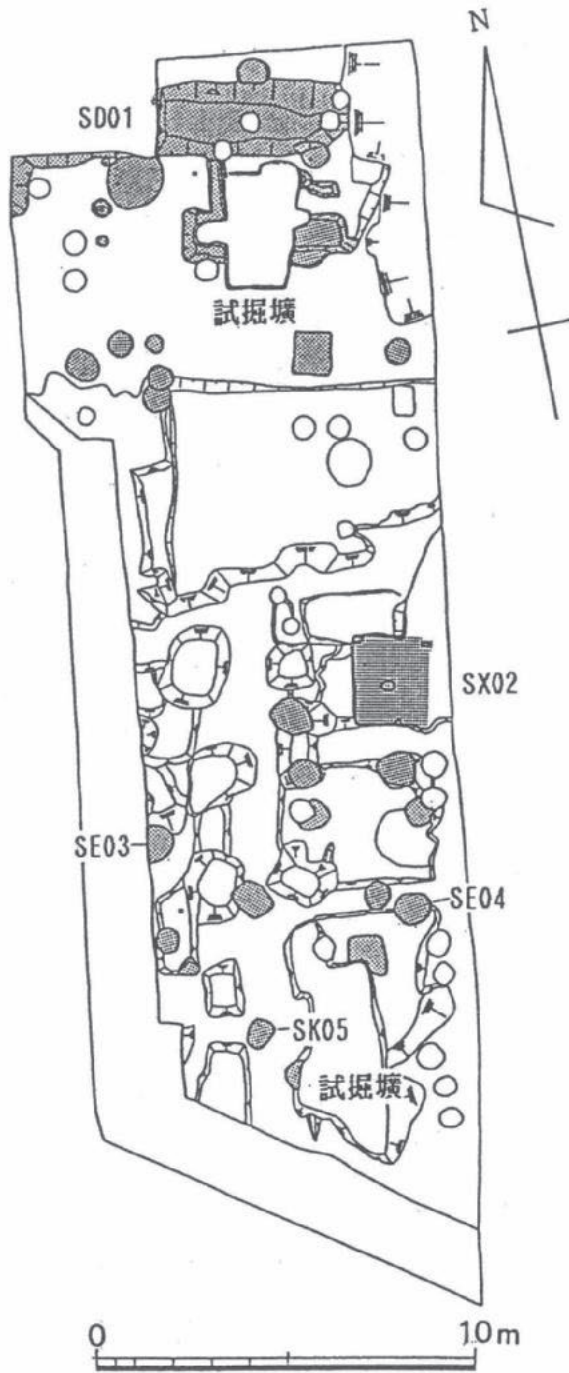


図25 ST90-2次調査地平面図

深さ約40cmで、大甕を埋めるには適当な大きさであるが、柱痕跡が確認されており、垂壺の掘形ではないようだ。「柱穴1」以外の穴が垂壺の掘形であった可能性はある。

周囲には同様の遺構が存在しておらず、この遺構が単体で存在しているようである。これらが一連の酒造遺構の男柱とすれば、伊丹郷町で分類されている「1類：1槽さし単基型」となる[赤松和佳2019]。時期は先の南北大溝や掘立柱建物と同じ頃と想定されているが、詳細な時期は不明である。

92-10次調査地の南に位置するST90-2次調査地は調査範囲の北端で、幅約2mの東西大溝を検出している(図25)。出土遺物から15世紀以降に掘削され、豊臣期に埋没したと推定されている。このほか、鎌倉時代・室町時代・安土桃山時代のほか、井戸が17基見つかっている。井戸が継続して作られる敷地だったようだ。

90-2次調査地の西にあるST12-5次調査地は国道25号線と谷町筋の交差点に位置する。現在の敷地でもわかるように、西の谷町筋に間口を開いていたようだ。平安時代には井戸が1基、土坑が1基見つかっている(図26)。中世では室町時代後半の15世紀後半から16世紀前半に属する遺構が調査地の東部に集中する。調査地の西部には豊臣期に埋没する幅11m以上にもなる堀状の遺構があり、前代の遺構を削平している。この堀状遺構は南北方向に伸びているようだ。



図26 ST12-5次調査地平面図

まとめ

四天王寺旧境内遺跡で見つかった中世の遺構を紹介したが、境内の四周で見つかっている遺構群に違いがある。最初に取

り上げた東部では、ST96-4次調査地で2棟の礎石建物が見つかるだけで、他の調査地では寺域の周囲を画する大溝が見つかる。ただ、井戸はいくつか見つかり、人家が全くなかった環境ではない。しかし、調査成果から見ると、四天王寺境内の東側は、現在の境内のすぐ東側には比高が3mもある谷地形が境内の端に沿って南に伸びており、平坦地が狭い。こうした地形の制約があって、建物が建てにくく、町が広がらなかったのではないだろうか。そのような地形に於いても、寺域を画する大溝は伽藍の主軸に合わせるように南北方向の大溝を作っている。

境内北部でも区画の大溝が見つかる調査地が多い。狭い調査範囲なので建物遺構が見つからない可能性はあるが、柱穴の検出例は少ない。天正期の秀吉による城下町化で「字横町」の東西道路に面した街区は町屋となっているが、その南側の背後は境内地となっていた。17世紀末から18世紀初頭に制作されたとする『元和再建四天王寺境内絵図』では「火除地」となっており、18世紀末の『四天王寺伽藍火除地図』でも「火除地」であり、明治時代の『大阪実測図』では畠が広がる場所であり、町屋が建ち並ぶ場所ではなかった。秀吉による城下町化は境内地の北端部を強制的に収容し町屋を建設したのであろう。東西方向の道路の主軸が、北の南北平野町の主軸に直行していることがその証左と考える。

境内西側及び南側では多くの柱穴を見つけており、建物が多く建ち並んでいたことが推測できる。殊に谷町筋の東側では数多くの柱穴が見つかり、この一帯は掘立柱建物が建ち並ぶ四天王寺門前町の中心部であったようだ。柱穴だけではどのような職業であるのか推定できないが、『天王寺執行行政所引付』（文明4年（1472））では様々な職種の借家や店が並んでいることが分かる。

南側のST92-10次調査地で見つかる「柱穴及び柱穴関連遺構1」は酒造遺構の可能性を想定したが、『天王寺執行行政所引付』にも「西門 酒借家」「擬宝珠酒屋 十七間」との記載があり、酒造業の店が存在している。

境内西側は平安時代の遺構が多く見つかり、平安時代以降、鎌倉・室町時代と継続して多くの人たちが居住し、経済活動を行っていたことがわかる。鎌倉時代の様子を知る文献史料はないが、中世大阪の経済拠点としての四天王寺門前町の基盤は、難波宮廃都後の平安時代に確立されているようだ。平安時代においては境内の四周全域に遺構群が点在するが、やはり西側地域に濃密に展開している。平安時代には浄土信仰の流行により四天王寺西門付近に人々が集まるようになってきたようだ。

そしてその後、鎌倉時代になると平安時代に遺構が見つからなかった地点においても、鎌倉時代の食器である瓦器が出土しており、建物が建つ敷地が増え人口も増加してきたのではないだろうか。ハマグリの貝殻を投棄した土坑や井戸の多くは西側の調査地で見つかり、上町台地の西側の海が採集活動の場所であった。そしてその海は極楽浄土への入口でもあった。

室町時代には「天王寺ハ七千間在所」とまで言われた都市であり、様々な職種の職商人が住まう産業都市となっていた。この頃には四天王寺伽藍の主軸と同じ方向の街路が出現し、『大阪実測図』に見られる街区の町が完成したと考える。四天王寺は室町時代後半には織田信長の本願寺攻めの陣として長期間にわたって利用されていたが、それは門前町が持つ経済力の支えがあったからこそであろう。

出土遺物を見ると、平安時代から15世紀末や16世紀前半の遺物は境内の四周全域の全調査地点で認

められるが、大坂本願寺との戦いである元亀天正の乱期の16世紀後半から17世紀初頭の遺物群は出土地点が西部に偏っており、時期が下ると集落の場所が境内の西側に集中するようになったことがわかる。これは遺構群の偏りとも一致する。

引用・参考文献

※本文に記載した発掘調査の成果は各調査の発掘調査略報を参考にした。

赤松和佳2019、「近世酒造遺構の特徴 - 酒の町伊丹郷町を事例に -」、「近世考古学の提唱」50周年記念研究大会資料『近世の酒と宴』

大阪市文化財協会1996、『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』Ⅰ

大阪市文化財協会1999、「第Ⅳ章四天王寺旧境内遺跡の調査 第2節ST96-4次調査」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告 - 1966年度 -』

大阪文化財研究所2013、『北河堀町所在遺跡発掘調査報告』

大阪文化財研究所2015、『大阪市北部遺跡群発掘調査報告』

植木久1987、「四天王寺伽藍についての若干の考察 - 四天王寺旧境内における最近の発掘調査から -」大阪市史編纂所編『大阪の歴史』第21号

内田九州男1989、「豊臣秀吉の大坂建設」佐久間貴士編『よみがえる中世 本願寺から天下一へ 大坂』2、平凡社

大阪市1988、『新修大阪市史』第2巻

黒田慶一1996、「壺鏡と墨書土器」大阪市文化財協会編『葦火』65号

積山洋2002、「難波京の変容 - 奈良末から平安前期の様相をめぐって -」『条里制・古代都市研究』第18号

西近畿文化財調査研究所2006、『伶人町遺跡発掘調査概要報告書』

豆谷浩之1996、「四天王寺の寺域と「境内」について - 調査の成果を手がかりに -」大阪市文化財協会編『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』Ⅰ

宮本佐知子1993、「天王寺さんの西門前」大阪市文化財協会編『葦火』44号

村元健一2014、「発掘調査成果から見た平安時代の上町台地とその周辺」『平成21～25年度（独）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A） 大阪上町台地の総合的研究 - 東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型 -』大阪文化財研究所・大阪歴史博物館

The former site of the Shitenno-ji Temple site in the medieval period

MATSUO Nobuhiro

In the vicinity of Shitennoji Temple, built in the Asuka period, ruins from ancient times to the early modern times have been found by excavation.

In the Middle Ages, a city was formed around Shitennoji Temple, and at the end of the 15th century, it was a huge city that was said to have “7,000 houses in Tennoji.”

I used the results of excavations around Shitennoji Temple to examine the appearance of the city around Shitennoji Temple in the Middle Ages.

Wide trenches are found in the eastern and northern parts of Shitennoji Temple, but as the times change, they will be made closer to the precincts.

In addition, it was estimated that the town did not spread due to topographical constraints. Many pillar holes were found in the western part of Shitennoji Temple, and it was estimated that the city was lined with many buildings.

It was assumed that the appearance of the city dates back to the Heian period and was a completed block in the Muromachi period.